



祖母からの贈り物

岐阜聖徳学園大学教育学部 4年 緒方 美乃里

同級生たちが皆、それぞれの進路を決定し始めた大学三年生の春休み。その知らせは突然だった。祖母が亡くなった。

祖母は歌や物語が大好きな人だった。両親の仕事の都合で、小学校時代は祖母によく面倒を見てもらった。学校からそのまま祖母宅に帰り、用意してもらったおやつを食べ、祖母のいる前で宿題をする。これが私の日課だった。宿題には毎日、音読があった。国語の教科書から、その時習っている箇所の本文を読むのである。私が読んだ後、祖母も教科書を手に取り読んだ。祖母は実に表現豊かに読む。私は自分で読むよりも、祖母の音読を聞く方が好きであった。

数々の音読の中で、私が今でもよく思い出す物語がある。春を憧れる雪だるまのお話。

寒い冬の季節を生きる雪だるまが、暖かい春を待ちわびる。しかし、雪だるまが春を迎えることはできない。春の始まりと同じ時に溶けてなくなってしまうからだ。この物語を読むと祖母は決まって涙を流した。毎日毎日声に出して読むでは泣いた。まだ七歳だった私にとって、それは衝撃であった。何が祖母をそうさせるのか。物語は不思議だと思った。単なる言葉の連なりが、時の流れや風景、心情までも浮かび上がらせる。これはただ物

ではないと思った。祖母との何気ない宿題の時間が私を、言葉を読むことの面白さに気づかせてくれた。また、祖母は私に国語の奥深さを教えてくれたのだ。こうして私は国語が大好きになったのだ。

そんな私も、もう大学四年生。来春から中学校で国語の教師となることが決まった。言葉が生み出す無限の想像と感動を、国語が持つ魅力を、今度は私が子どもたちに教えていくのだ。これは祖母が与えてくれた私の人生の道。祖母と別れた春を出発点に、私の新しい道がスタートするのだ。祖母からの最高の贈り物を、私は生涯をかけてじっくり歩んでいきたい。

〔審査評〕「春を憧れる雪だるまのお話」この作文を読むと、祖母の姿や愛、7歳のころの楽しそうな私が自然と浮かび上がってくる。物語のもつ、想像力とその感動がよみがえる。これこそが物語のもつ大きな力。祖母の優しい眼差し、広い心、情景や心情が浮かぶ。祖母の影響を真正面に受けて、春から国語の教師として次のステップに進む私。言葉の持つ力強いエネルギーを感じる素敵な作品です。

宮脇一徳